

# 石川県松山寺・總持寺祖院調査報告—平成三十年年度研究調査報告

鶴見大学仏教文化研究所客員研究員 尾崎 正善

## はじめに

当研究所は、毎年『伝光録』写本及び總持寺関連史料の調査・収集を行っている。

まず、『伝光録』に関しては、諸本対校翻刻作業を継続的に行っているため、その翻刻作業に必要な原本の閲覧・撮影を優先的に行いこれを終了した。次の段階として、昨年より各地の『伝光録』写本の収集を開始した。これは、仏教文化研究所に『伝光録』テキストの基礎的データベースを構築しようと計画しているからである。さらに昨年度より、總持寺関連史料の収集に着手している。

一昨年は、石川県龍門寺・永光寺の『伝光録』を中心に、昨年は、愛知県長円寺の『伝光録』及び宗門関係史料の調査を行った。今年度は、石川県松山寺の『伝光録』と大本山總持寺祖院の調査・撮影を行った。以下、その調査に関する報告である。

## 一、調査概要

① 日程 平成三十年九月三日～五日

◎ 九月三日

金沢駅集合

車にて市内、松山寺に移動

午後一時より三時三十分まで 松山寺本『伝光録』調査・撮影

車にて輪島市に移動。輪島泊

◎九月四日

ホテル出発

午前九時より午後四時まで、昼食をはさみ 總持寺祖院調査・撮影

輪島泊

◎九月五日

ホテル出発

午前九時より十一時まで 總持寺祖院調査・撮影

十一時 車にて小松空港へ移動 横浜への帰路に着く

## ② 調査場所

松山寺（石川県金沢市東兼六町）

總持寺祖院（石川県輪島市門前町門前）

## ③ 参加者

木村清孝・尾崎正善・小島裕子・横山龍顯・武井慎悟

一一、調査成果

①松山寺

松山寺所蔵『伝光録』（二巻二冊）は、現在知られる写本の中では、乾坤院本・龍門寺本に次いで三番めに古い、江戸初期の写本とされる。

筆者は、松山寺開創融山泉祝（寛永四年（二六二七）十二月五日寂）で、書写年代は、慶長四年（一五九九）～寛永四年（二六二七）と推定されている。それは、収納する箱の表及び下巻の奥書に以下のように記されることによる。

〈外箱〉

瑩山和尚洞谷録 二冊

當寺開山祝老和尚眞筆

〈内箱〉

當寺開山祝老和尚眞筆

瑩山和尚洞谷録 二冊

松山寺常什物

〈奥書〉

當寺開山祝老和尚當時在世之際手書

永光第一祖瑩山禪師洞谷語録上下両

冊以及虫残破壊一日聞達

大檀貴林賢公之信威而將錦繡之帛紙

修補蔽飾況復表體造栗色塗梧桐方篋

為屋也今得修理檀護永傳當寺為重寶

也亂不許他方借失也

時 正徳第四甲午歲孟冬吉旦

見住松山典經山叟謹識 印 印

當寺開山和尚眞筆事此老非年代深遠

漸九十年已往僧九十年後當寺校割牒記

載來誰以各住持之殊勝豈得容易讓他

手也

その存在に関しては、古くから知られていたが、今回の調査で新たに明らかになった特徴がある。

第一に料紙の特徴である。多くの写本が白無地であるのに対し、松山寺本は、白・黄（白か）・赤・茶・青等、複数の色紙が使用されている。なお、色の排列に関しては、規則性が確認できない。下巻は、白と茶・赤が交互に使用されるなど、使用する色紙が減少する。こうした色紙使用の事例は、極めて特異といえる。

第二に全ての料紙の周囲に匡郭が引かれる点である。こうした枠を引いた料紙に書写した『伝光録』の例は、確認できない。以上の様な特徴も、今回原本を閲覧して始めて判明したことである。

## ② 總持寺祖院

今回の祖院調査は、今後の資料調査の前段階、予備調査を想定していた。既に祖院史料の全容に関しては、圭室文雄『曹洞宗大本山總持寺能登祖院古文書目録』（平成十七年三月）が刊行され、さらに追加の調査報告も教示されて

いたので、その概要を想定することは可能であった。

しかし、史料が何処にどのような状態で保存され、また、どのような形で分類・整理されているのか。実際に収蔵庫に入り、その状況把握と所蔵場所の位置確認、さらに今後の作業手順・方針を勘案する調査と位置付けていた。

今回の調査では、書庫に入りその状況を確認すると共に、撮影作業を行った。

書庫より該当史料を搬出し、部屋をお借りして以下の史料を撮影した。

『住山記』二十三冊、『謚公文』十七冊の全て、『転衣寺院名簿書上』（永平寺分）十六冊、さらに「永平寺学寮創設之事」・「永平寺入祖堂名簿序」・「道元禪師国師号勅許之序」・「道元禪師江国師号勅許件」・「永平寺總持寺争論の次第書上」・「告達（宗祖禪師・国師追号二付）」・「吉利支丹宗門改二付」・「口上（勸修寺修後金として毎年百両宛十ヶ年上納の事）」・「書状（箱館奉行所願之通新寺建立二付）」・「乍恐御内々奉願上条口上之覚（永平寺・三ヶ寺と分離独立二付反論書）」・「乍恐奉歎願候（案）」・「俊堯以下四出世之儀二付」・「改曆吉兆祝儀之事」等を撮影した。

今回『転衣寺院名簿書上』は、その一部しか撮影することができなかつた。今後継続して撮影を予定している。それは、永平寺瑞世の実態について、明らかにするためである。

さらに、関連史料の一部を撮影したが、これらは全体の極一部である。今後、継続して撮影を行うものとする。今回は、予備調査の性格が強かったが、撮影作業も行うことができ大変有意義であった。

## おわりに

以上のように、總持寺祖院を中心に、石川県下の関連史料の調査を行った。

今後『伝光録』の基礎データ収集に尽力すると共に、祖院資料の調査・撮影を継続して行く予定である。